

Angle Resolved Light Scattering に関するまとめ

中野武雄

1996-12-12

概要

この文書は H. -N. Yang, G. -C. Wang and T. -M. Lu の著書 “Diffraction from rough surfaces and Dynamic Growth Fronts” の 2-3 章の議論を抜粋してまとめたものである。原文では連続表面と結晶表面とを並行して記述しているが、ここでは連続表面を中心にまとめた。

1 表面散乱の一般論

1.1 表面散乱における構造因子

空間に分布した媒体によって波が散乱されるとき、散乱ベクトル k に対応する散乱振幅 $A(k)$ は

$$A(k) = \int D(x) e^{-i\mathbf{k}\cdot\mathbf{x}} d^3x \quad (1)$$

で与えられる。 $D(x)$ は散乱密度と呼ばれる量で、 x における散乱のされやすさに対応する。

マクロなスケールで見たときに xy 平面に平行であるような表面を考え、そのミクロな z 座標が

$$z = z(\boldsymbol{\rho}) \quad (2)$$

で与えられるものとする。 $\boldsymbol{\rho}$ は xy 平面上の 2 次元座標である。このとき入射波の散乱が表面でしか起こらないとすると、散乱密度 D は

$$D(\boldsymbol{\rho}, z') = \delta(z' - z(\boldsymbol{\rho})) \quad (3)$$

と表すことができる。すると式 1 は

$$\begin{aligned} A(k) &= \int D(\boldsymbol{\rho}, z') e^{-ik_{\perp}z'} e^{-i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\boldsymbol{\rho}} dz' d^2\rho \\ &= \int e^{-ik_{\perp}z(\boldsymbol{\rho})} e^{-i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\boldsymbol{\rho}} d^2\rho \end{aligned} \quad (4)$$

となる。 k_{\perp} は k の z 方向成分、 \mathbf{k}_{\parallel} は xy 平面に平行な成分 (二次元ベクトル) である。

散乱の構造因子 $S(k)$ は、散乱振幅の絶対値の自乗として定義されており、

$$\begin{aligned} S(k) &= A^*(k)A(k) \\ &= \int d^2\rho' e^{ik_{\perp}z(\boldsymbol{\rho}')} e^{i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\boldsymbol{\rho}'} \int d^2\rho e^{-ik_{\perp}z(\boldsymbol{\rho})} e^{-i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\boldsymbol{\rho}} \\ &= \iint d^2\rho' d^2\rho e^{ik_{\perp}[z(\boldsymbol{\rho}')-z(\boldsymbol{\rho})]} e^{i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot(\boldsymbol{\rho}'-\boldsymbol{\rho})} \end{aligned} \quad (5)$$

となる。ここで $\mathbf{r} = \boldsymbol{\rho}' - \boldsymbol{\rho}$ として積分を書き換えると、

$$S(\mathbf{k}) = \int d^2r \left(\int d^2\rho e^{ik_{\perp}[z(\mathbf{r}+\boldsymbol{\rho})-z(\boldsymbol{\rho})]} \right) e^{i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\mathbf{r}} \quad (6)$$

を得る。

式 6 の内側の積分項を積分領域の面積で割ったものを位相相関関数 (原書では Height difference function) $C(k_{\perp}, \mathbf{r})$ と定義する。すなわち

$$\begin{aligned} \frac{1}{A} \int d^2\rho e^{ik_{\perp}[z(\mathbf{r}+\boldsymbol{\rho})-z(\boldsymbol{\rho})]} &= \langle e^{ik_{\perp}[z(\mathbf{r}+\boldsymbol{\rho})-z(\boldsymbol{\rho})]} \rangle \\ &\equiv C(k_{\perp}, \mathbf{r}) \end{aligned} \quad (7)$$

である。ここで $A \equiv \int d^2\rho$ である。定数係数 A を無視して最終的な散乱構造因子を

$$S(\mathbf{k}) = \int d^2r C(k_{\perp}, \mathbf{r}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel}\cdot\mathbf{r}} \quad (8)$$

と定め、以降ではこれを用いることにする。

1.2 Gauss 表面における位相相関関数

位相相関関数を計算するには、 xy 平面上の距離 r だけ離れた 2 点間における高さの違い $\Delta z = z(\mathbf{r}) - z(\mathbf{0})$ がどのような分布関数になっているかを知る必要がある。今この関数を $g(\Delta z, \mathbf{r})$ とすると、位相相関関数は

$$C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = \langle e^{ik_{\perp}[z(\mathbf{r}+\boldsymbol{\rho})-z(\boldsymbol{\rho})]} \rangle = \int d(\Delta z) g(\Delta z, \mathbf{r}) e^{ik_{\perp}\Delta z} \quad (9)$$

と書ける。これは式 7 での積分を $\int d^2\rho$ から $\int d(\Delta z) g(\Delta z, \mathbf{r})$ に変換したものと考えることができる。

ちなみに変位 Δz の自乗平均は高さ高さ相関関数 (Height-height correlation function) と呼ばれるが、これはこの $g(\Delta, \mathbf{r})$ を用いると

$$H(\mathbf{r}) \equiv \int d(\Delta z) (\Delta z)^2 g(\Delta z, \mathbf{r}) = \langle [z(\mathbf{r}) - z(\mathbf{0})]^2 \rangle \quad (10)$$

のように定義できる。

以降の計算では、この $g(\Delta z, \mathbf{r})$ が Gauss 分布

$$g(\Delta z, \mathbf{r}) = \frac{1}{\sigma\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{(\Delta z)^2}{2\sigma^2}} \quad (11)$$

をしているものとする (重要な仮定なので良く認識しておく)。またこのとき一般に分散 σ は r の関数であることに注意。

このときの位相相関関数は

$$C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = \int_{-\infty}^{\infty} d(\Delta z) \frac{1}{\sigma\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{(\Delta z)^2}{2\sigma^2}} e^{ik_{\perp}\Delta z} = e^{-\frac{1}{2}(k_{\perp}\sigma)^2} \quad (12)$$

となる。

また高さ高さ相関関数は

$$H(\mathbf{r}) = \int_{-\infty}^{\infty} d(\Delta z) (\Delta z)^2 \frac{1}{\sigma\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{(\Delta z)^2}{2\sigma^2}} = \sigma^2 \quad (13)$$

となる。式 12 と式 13 をまとめると、

$$C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = e^{-\frac{1}{2}(k_{\perp})^2 H(\mathbf{r})} \quad (14)$$

という関係が与えられることになる。

2 自己アフィン表面における構造因子

2.1 自己アフィン表面

一般に『表面ラフネス』という場合には、高さの自乗平均 (Root Mean Square: RMS) w が用いられる場合が多い。これは

$$w^2 = \langle [z(\mathbf{r}) - \langle z \rangle]^2 \rangle \quad (15)$$

と定義されている。これと先に述べた高さ高さ相関関数との関係は、

$$\begin{aligned} H(\mathbf{r}) &= \langle [z(\mathbf{r}) - z(\mathbf{0})]^2 \rangle \\ &= \langle \{ [z(\mathbf{r}) - \langle z \rangle] - [z(\mathbf{0}) - \langle z \rangle] \}^2 \rangle \\ &= \langle [z(\mathbf{r}) - \langle z \rangle]^2 \rangle + \langle [z(\mathbf{0}) - \langle z \rangle]^2 \rangle - 2 \langle [z(\mathbf{r}) - \langle z \rangle][z(\mathbf{0}) - \langle z \rangle] \rangle \\ &\sim 2w^2 (|\mathbf{r}| \rightarrow \infty) \end{aligned} \quad (16)$$

となる。3番目の式の最終項は、 \mathbf{r} が充分大きくなって $z(\mathbf{r})$ と $z(\mathbf{0})$ に相関がなくなれば 0 になる。

一方 $\mathbf{r} \rightarrow 0$ となるに従い $H(\mathbf{r}) = \langle [z(\mathbf{r}) - z(\mathbf{0})]^2 \rangle \rightarrow 0$ となるはずだから、 $H(\mathbf{r})$ の一般的な振る舞いは

$$H(\mathbf{r}) \sim \begin{cases} r^{2\alpha} & (r \ll \xi) \\ 2w^2 & (r \gg \xi) \end{cases} \quad (17)$$

と仮定する。この時 ξ は横相関長 (lateral correlation length) と呼ばれる。

もしこのような $H(\mathbf{r})$ を

$$H(\mathbf{r}) = 2w^2 f\left(\frac{r}{\xi}\right) \quad (18)$$

と書くと、関数 $f(X)$ は $X \ll 1$ で $f(X) = X^{2\alpha}$ 、 $X \gg 1$ で $f(X) = 1$ となる。このような関数としては、例えば

$$f(X) = 1 - e^{-X^{2\alpha}} \quad (19)$$

などがある。このとき $r \ll \xi$ における $H(\mathbf{r})$ の漸近的な関数形は

$$H(\mathbf{r}) = 2 \left(\frac{r}{\eta} \right)^{2\alpha} \quad (20)$$

と書けることになる。ここで $\eta = \xi w^{-\frac{1}{\alpha}}$ は散乱において重要な量になることが後に示される。

2.2 自己アフィン表面の散乱因子

散乱因子と位相相関関数の関係を再掲する。

$$S(\mathbf{k}) = \int d^2r C(k_{\perp}, \mathbf{r}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}}$$

また、相対変位 $z(\mathbf{r}) - z(\mathbf{0})$ が Gauss 分布をしている表面での位相相関関数 $C(k_{\perp}, \mathbf{r})$ は

$$C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = e^{-\frac{1}{2}(k_{\perp})^2 H(\mathbf{r})}$$

であった。

自己アフィンフラクタル表面においては $r \rightarrow \infty$ において $H(\mathbf{r}) \rightarrow 2w^2: \text{const}$ であるから、この時の位相相関関数 $C(k_{\perp}, \mathbf{r} \rightarrow \infty) \equiv C_{\infty}(k_{\perp})$ は、 r によらない k_{\perp} だけの関数と考えることができる。この $C_{\infty}(k_{\perp})$ を用いて位相相関関数を

$$C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = C_{\infty}(k_{\perp}) + \Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r}) \quad (21)$$

のように分けて書くことにする。 $\Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r})$ は言うまでもなく

$$\Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = C(k_{\perp}, \mathbf{r}) - C_{\infty}(k_{\perp}) \quad (22)$$

で与えられる関数である。

この関係を用いると散乱因子は

$$S(\mathbf{k}) = \int d^2r C_{\infty}(k_{\perp}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} + \int d^2r \Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} \quad (23)$$

となる。第一項では C_{∞} が積分の前に出て、残りは delta 関数となる (ホワイトノイズの Fourier 変換)。

$$\int d^2r C_{\infty}(k_{\perp}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} = (2\pi)^2 C_{\infty} k_{\perp} \delta(\mathbf{k}_{\parallel}) = (2\pi)^2 e^{-(k_{\perp} w)^2} \delta(\mathbf{k}_{\parallel})$$

実際には測定系の窓関数 (通常 Gauss 関数) が convolution された形で見えるので、この δ 成分は Gauss 関数として観測される。

また δ 成分は $k_{\perp} w$ の増加と共に急激に減少する関数であることに注意する。形式的には X 線回折でいうところの Debye-Waller 因子と同じになる。熱振動の振幅の自乗平均が自乗平均ラフネスに対応する。

一方第二項を $S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, k_{\perp})$ と定義する。すなわち

$$S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, k_{\perp}) = \int d^2r \Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r}) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}}$$

である。これがバックグラウンドの拡散散乱成分 (Diffuse 成分) を与える。

以上まとめると自己アフィンフラクタル表面における散乱因子は

$$S(\mathbf{r}) = (2\pi)^2 e^{-(k_{\perp} w)^2} \delta(\mathbf{k}_{\parallel}) + S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, k_{\perp}) \quad (24)$$

と書けることになる。

2.3 Diffuse 成分の形

位相相関関数のうち自己アフィンな変化をする成分 $\Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r})$ の形をもう一度書くと、

$$\Delta C(k_{\perp}, \mathbf{r}) = e^{-\frac{1}{2}\Omega H(\mathbf{r})/w^2} - e^{-\Omega} \quad (25)$$

となっている。ただし $\Omega \equiv (k_{\perp} w)^2$ と置いた。

式 18 で定義されたスケーリング関数を用いると、

$$\frac{H(\mathbf{r})}{2w^2} = f(r/\xi) \quad (26)$$

であるから、結局散乱成分は

$$\begin{aligned} S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, kv) &= \int d^2r \left[e^{-\Omega f(r/\xi)} - e^{-\Omega} \right] e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} \\ &= e^{-\Omega} \int d^2r \left\{ e^{\Omega[1-f(r/\xi)]} - 1 \right\} e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} \end{aligned} \quad (27)$$

と書ける。ここで中括弧の中身 $P(r) = P(r) \equiv e^{\Omega[1-f(r/\xi)]} - 1$ が r の方向によらず、絶対値のみの関数であるとする（すなわち方位角に対してラフネスが等方的）。すると式 27 の積分は

$$\begin{aligned} \int d^2r P(r) e^{i\mathbf{k}_{\parallel} \cdot \mathbf{r}} &= \int_0^{\infty} P(r) r dr \int_0^{2\pi} d\theta e^{ik_{\parallel} r \cos \theta} \\ &= 2\pi \int_0^{\infty} r dr P(r) J_0(k_{\parallel} r) \\ &= 2\pi \int_0^{\infty} \left\{ e^{\Omega[1-f(r/\xi)]} - 1 \right\} J_0(k_{\parallel} r) \end{aligned} \quad (28)$$

$$(29)$$

となる。ここで J_0 は 0 次の Bessel 関数である。定義は次の式。

$$J_0(k_{\parallel} r) = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} d\theta e^{ik_{\parallel} r \cos \theta}$$

ここで $P(r)$ をテイラー展開する。

$$P(r) = e^{\Omega[1-f(r/\xi)]} - 1 = \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m!} \left\{ \Omega \left[1 - f\left(\frac{r}{\xi}\right) \right] \right\}^m \quad (30)$$

これを式 27 および式 28 に代入してまとめると、

$$\begin{aligned} S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, k_{\perp}) &= 2\pi e^{-\Omega} \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m!} \Omega^m \int_0^{\infty} r dr \left[1 - f\left(\frac{r}{\xi}\right) \right]^m J_0(k_{\parallel} r) \\ &= 2\pi \xi^2 e^{-\Omega} \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m!} \Omega^m \int_0^{\infty} X dX [1 - f(X)]^m J_0(k_{\parallel} \xi X) \\ &= 2\pi \xi^2 e^{-\Omega} \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m!} \Omega^m F(m, k_{\parallel} \xi) \end{aligned} \quad (31)$$

となる。2 番目の式では $r = \xi X$ として積分変数を無次元の変数 X にした。3 番目の式に現れる $F(m, k_{\parallel} \xi)$ は

$$F(m, Y) = \int_0^{\infty} X dX [1 - f(X)]^m J_0(YX)$$

と定義される関数である。

さらにここで $f(X)$ の具体的な形として、式 19 のようなスケール関数 $f(X) = 1 - e^{-X^{2\alpha}}$ を利用することにする。代入して $X' = m^{\frac{1}{2\alpha}}$ および $Y' = m^{-\frac{1}{2\alpha}} Y$ となるような変数 X' 、 Y' を用いることによって、

$$S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_{\parallel}, k_{\perp}) = 2\pi \xi^2 e^{-\Omega} \sum_{m=1}^{\infty} \frac{1}{m!} \frac{1}{m^{1/\alpha}} \Omega^m F_{\alpha}(k_{\parallel} \xi m^{-\frac{1}{2\alpha}}) \quad (32)$$

を得る。つまり $F(m, Y) = \frac{1}{m^{1/\alpha}} F_{\alpha}(Y m^{-\frac{1}{2\alpha}})$ と置き換わったわけである。この F_{α} の形は

$$F_{\alpha}(Y') = \int_0^{\infty} X' dX' e^{-X'^{2\alpha}} J_0(X' Y')$$

となる。

この関数 $F_\alpha(Y')$ は $Y' = 0$ で最大となる偶関数になる。ここで $F_\alpha(Y'_g) = 0.5F_\alpha(0)$ となるような Y'_g を定義すると、 $F_\alpha(k_\parallel \xi m^{-\frac{1}{2\alpha}})$ を k_\parallel の関数と見たときの半値幅は

$$\text{FWHM} = 2Y'_g \xi^{-1} m^{\frac{1}{2\alpha}}$$

となる。したがって式 32 は、半値幅が $\xi^{-1} m^{\frac{1}{2\alpha}}$ に比例して変わるような m 次の項の重ねあわせによって表現されていることになる。ここで係数項の $\frac{\Omega^m}{m! m^{1/\alpha}}$ は $m > \Omega$ で急激に減少するから、重要なのは $m \sim \Omega$ までの項ということになる。

ところで $\alpha = 0.5$ のときは

$$F_{1/2}(Y') \propto \frac{1}{[1 + Y'^2]^{3/2}}$$

となる。これは 2 次元の Lorentz 関数と呼ばれる。

2.4 Diffuse 成分の漸近形

2.4.1 $\Omega \ll 1$ のとき

この場合重要なのは $m = 1$ の項のみとなる。

$$S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp) \sim 2\pi\Omega\xi^2 e^{-\Omega} F_\alpha(k_\parallel \xi) \quad (33)$$

したがってこのとき Diffuse 成分の半値幅は $\text{FWHM} = 2Y'_g/\xi$ となる。ただし $\Omega \ll 1$ は δ 成分がかなり大きいので、測定は難しいかもしれない。

なお Y'_g は α に依存する量であることに注意する。

2.4.2 $\Omega \gg 1$ のとき

この条件は逆に δ 成分が非常に小さい場合である。詳しい式の導出は省略するが、式 32 の Bessel 関数の項を一度 Taylor 展開してまた戻す、という作業をすると、

$$S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp) \sim \left(\eta k_\perp^{-\frac{1}{\alpha}}\right)^2 F_\alpha\left(k_\parallel \eta k_\perp^{-\frac{1}{\alpha}}\right) \quad (34)$$

となる。 η は 2.1 節の最後に出てきた量で、定義は $\eta = \xi w^{-\frac{1}{\alpha}}$ であった。

したがってこの場合の半値幅は $\text{FWHM} = 2Y'_g \eta^{-1} (k_\perp)^{1/\alpha}$ となる。

3 自己アフィンパラメータの決定法

まず重要なことは、ミクロなスケールでの表面の特性は Diffuse 成分 S_{diff} に表れる、ということである。 α と ξ が該当する。

3.1 w : マクロスケールでの RMS ラフネス

1. δ 成分の強度 I_δ は $e^{-(k_\perp w)^2}$ に比例するので、 $\ln(I_\delta)$ と $(k_\perp)^2$ の傾きが $-w^2$ となる。

2. 構造因子の δ 成分 $S_\delta(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp) = (2\pi)^2 e^{-\Omega} \delta(\mathbf{k}_\parallel)$ であるから、

$$\int d^2 k_\parallel S_\delta(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp) = (2\pi)^2 e^{-\Omega}$$

である。一方構造因子全体の積分は

$$\begin{aligned} \int d^2 k_\parallel S(\mathbf{k}) &= \int d^2 k_\parallel \int d^2 r C(k_\perp, \mathbf{r}) e^{i\mathbf{k}_\parallel \cdot \mathbf{r}} \\ &= \int d^2 r C(k_\perp, \mathbf{r}) \int d^2 k_\parallel e^{i\mathbf{k}_\parallel \cdot \mathbf{r}} \\ &= \int d^2 r C(k_\perp, \mathbf{r}) (2\pi)^2 \delta(\mathbf{r}) \\ &= (2\pi)^2 \end{aligned}$$

である。 $H(0) = 0$ なので $C(k_\perp, \mathbf{0}) = 1$ であることを利用している。

したがって両者の比 R_δ は

$$R_\delta \equiv \frac{\int d^2 k_\parallel S_\delta(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp)}{\int d^2 k_\parallel S(\mathbf{k})} = e^{-\Omega}$$

となり、2 と同じ方法で w^2 が求まる。

3. δ 成分の代わりに Diffuse 成分の比 R_D を用いれば、

$$R_D \equiv \frac{\int d^2 k_\parallel S_{\text{diff}}(\mathbf{k}_\parallel, k_\perp)}{\int d^2 k_\parallel S(\mathbf{k})} = 1 - e^{-\Omega}$$

から求められる。もし $\Omega \ll 1$ なら $R_D \sim \Omega$ となる。

3.2 ξ : 横相関長

2.4.1 節で述べたように、 $\Omega \ll 1$ のとき、Diffuse 成分の半値幅が $\text{FWHM} = 2Y'_g/\xi$ となることを利用する。

3.3 α : ラフネス指数

逆に $\Omega \gg 1$ のときは、2.4.2 節で述べたように、Diffuse 成分の半値幅が $\text{FWHM} \propto (k_\perp)^{1/\alpha}$ となることを利用する。

また式 34 より $S_{\text{diff}}(\mathbf{0}, k_\perp) \propto (k_\perp)^{-2/\alpha}$ であることを利用しても求めることができる。

参考文献

- [1] H. -N. Yang, G. -C. Wang and T. -M. Lu; *Diffraction from rough surfaces and Dynamic Growth Fronts*, World Scientific (Singapore), 1993 (ISBN: 981-02-1536-3)